

卒業論文

# 天神インターナショナル・バーの人間学

---

## ——カジュアルな越境者たち——

平成 20 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース

社会学・地域福祉社会学専門分野

平成 24 年 1 月提出

## 目次

### はじめに

## 第1章 研究対象の概観——この特異な空間と人々

### 第1節 繁華街の中のカオス

#### 1.1 閉鎖的空間から開放的空間へ

#### 1.2 構成員の限定性の開放

#### 1.3 クラブにおける「仕掛け」

#### 1.4 福岡におけるクラブ・シーンの現われ——国際性の萌芽との関連から

### 第2節 このカオスを漂流する人々

#### 2.1 歴史上の漂流者たち——移民を例として

#### 2.2 マージナル・マン

##### 2.2.1 マージナル・マンの消極的側面と積極的側面

##### 2.2.2 ジンメルのマージナル・マン論

##### 2.2.3 パークのマージナル・マン論

##### 2.2.4 ストーンクイストのマージナル・マン論——マージナル・マンの発生条件に

#### についての考察

##### 2.2.5 マージナル・マンで「ある」ことと「なる」こと

## 第2章 調査——このカオスに生きる7人を対象として

### 第1節 調査概要

#### 1.1 調査目的

#### 1.2 調査方法

#### 1.3 調査対象

### 第2節 調査データ

#### 2.1 S氏の例

#### 2.2 Tの例

#### 2.3 M氏の例

#### 2.4 Aの例

#### 2.5 RさんとDの例

#### 2.6 Kの例

## 第3章 分析

### 第1節 「ここ」はどこか

#### 1.1 世界中に点在するカオス

##### 1.1.1 コンテンツを共通言語に

##### 1.1.2 クラブのもつ、我々を「脱ラベル化」する力

##### 1.1.3 クラブに対するノスタルジックな感覚

#### 1.1.4 クラブというマージン

##### 第2節 「彼ら」はだれか

##### 2.1 彼らのもつマージナリティ

##### 2.2 カジュアルな越境者たち

##### 2.3 ポジティブな反抗心

おわりに

[参考文献]

[参考 URL]

## 要約

私は、2010年からの1年間「インターナショナル・バー・S」なるクラブでアルバイトを経験した。その特異な空間やそこで出会う人々は、強く私を惹きつけた。その「魅力」の正体を明らかにし、ここに記すこと。そのことを目的に本論は執筆されている。

まず第1章では、研究対象の概観と題し、この空間と人々の歴史や背景を捉えようと試みた。その中で、私は以前より繁華街の中に存在していた、雑多な者たちの集う一種「カオス」的な空間、その空間のひとつがクラブであると推測した。また、クラブはその開放性にそれまでのカオス的空間と様相を異ならせる特徴があるとした。それまでは、カオスと言いつつもその中に細かにコミュニティが乱立していたが、クラブはそのコミュニティを内破させ、全体を包み込む大きなひとつのコミュニティをつくりだすこと、またさらに門戸を広く開けることを可能とした。また、その開放性を実現させた仕掛けとして、酒、音楽、共通の経験といったクラブ独自のコンテンツをあげた。また、「ひと」に関しては、「漂流者」という言葉、また、そこから派生して「マージナル・マン」という言葉をキーワードに彼らを捉えようとした。そのためにここでは「マージナル・マン論」を概観し、その研究潮流に加え、ジンメル、パーク、ストーンキストの3者のマージナル・マン論を取り上げた。加えて、倉橋の主張する、マージナル・マンで「ある」と「なる」との区別の必要性にも言及した。

第2章では、いよいよ、私が実際に出会った人々についての調査結果を記した。調査対象者は私があの空間で出会った者たちの中からあらゆるマージナルな状況にあるのではないかと予想される7人を選んだ。ここでの調査方法は、私がクラブSに身を置いていた1年間の参与観察を中心に補足的にインタビュー調査を加えるかたちになっている。

第3章では、前章の調査結果に分析を加えるかたちになっている。まず、第1章で述べたクラブの開放性、またそれを可能にするクラブの仕掛けについて、それが実際に調査の中で見られたかを検討した。結果としては、それらの特徴は調査の中ではその一片が見られ、さらに自身が「脱ラベル化」する力、と仮称した新たな機能も見られた。さらに世界に点在するクラブの同一性ゆえに、クラブに対して「ノスタルジックな感覚」が形成されるのではないかと、との考察も加えた。そして、これらの機能はすべて、クラブに、種々雑多な者たちを一堂に集めることを可能にする仕掛けとして働いているとした。このことは、つまり種々雑多な文化が同時に存在する、複文化状況をクラブの中にも実現した。つまり、クラブは複文化状況が同時に存在し重なり合う、やはりマージンであると分析した。そして、次いでその中で出会った彼らについて考察を加えた。彼らの中に、第1章にて概観したようなマージナル・マンの特徴が見てとれないかを顧みた。結果として、彼らの中に確かにその一片をみることができた。しかしながら、それだけでは説明しきれない言動が残った。従来のマージナル・マン研究では個人がマージナル・マンになるトリガーとしての「移動」は論じられてきたものの、マージナル・マンとなって以降の彼らの「移動性」に

については論じられてこなかった。もしくは、マージナル・マンとなった後はその場に定住し続けることがさも当然かのように論じられてきた。しかしながら、彼らはむしろ、自身の新しい場所となった新たな文化状況さえも軽やかに飛び越えていくかのようなカジュアルさを持ち合わせていたのだ。彼らは、国境を、文化の境を、マージナリティを、そして時として自分自身でさえも飛び越えて行ってしまうのだ。そしてこのことこそ、彼らの「魅力」の正体ではなかろうか、と結論付けるのである。そして、加えて彼らに共通して見られた「反抗心」ともいえる強い意志についても言及した。そして、「おわりに」として、その中で自身が本論執筆を通して得た見地に就いて触れ、終筆としている。